9人の写真家が見た水俣

2022 4/27 wed.－6/10 fri. 10:00-17:00 日曜・祝日休館

会場｜熊本日日新聞社「新聞博物館」

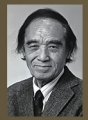
熊本市中央区世安1-5-1　入場無料

「靴の上から足をもむ」
©Fumiko Tanaka

主催｜水俣・写真家の眼プロジェクト　共催｜熊本日日新聞社 新聞博物館　後援｜熊本県教育委員会

桑原史成
塩田武史
宮本成美
アイリーン M. スミス
石川武志
北岡秀郎
小柴一良
芥川　仁
田中史子

水俣病に長く係わりを持つ9人の写真家と遺族が一堂に会し、「水俣・写真家の眼プロジェクト」を立ち上げました
60年にわたり撮影した、20万点を超えるカットの保存と活用を目的に、2022年5月に法人を設立します
その出発として写真展を企画します



桑原史成
Shisei Kuwabara

1936年、島根県津和野町に生まれる。60年7月から水俣病の撮影を開始。郷里の笹ケ谷銅山の砒素鉱毒と重ね合わせた。主な撮影テーマは水俣病、筑豊炭田、激動の韓国、沖縄、ベトナム戦争、北朝鮮、アラスカ、カンボジア、旧ソビエト連邦の崩壊。

塩田武史
Takeshi Shiota

1945年、香川県高松市に生まれる。70年、水俣に移住。72年、第一回国連人間環境会議・ストックホルムを水俣病患者とともに訪問。75年、カナダの原住民居留地を水俣病患者とともに訪問・取材。85年、熊本に移住。2014年9月死去。

宮本成美
Shigemi Miyamoto

1947年、京都に生まれる。70年、業界紙の仕事で、厚生省水俣病補償処理委員会への抗議の現場を取材したのが水俣病との出会い。以後、巡礼、一株運動、劇「苦海浄土」、自主交渉、砂田明、不知火海学術調査団、緒方正人、東京水俣展を取材・記録。

アイリーン M. スミス
Aileen M. Smith

1971年から水俣病取材のため、水俣に3年間住む。75年写真集「MINAMATA」英語版をユージン・スミス氏と出版。現在、脱原発、日本の原子力政策、プルトニウム利用問題などに取り組む市民グループ「グリーンアクション」代表。京都在住。

石川武志
Takeshi Ishikawa

1950年、愛媛県に生まれる。71年、ユージン・スミス氏と出会う。アシスタントに勧められ、水俣の撮影を始める。78年、アジアの祭りや民族を取材。82年、インドのトランスジェンダー社会「ヒジュラ」の取材を開始。2008年、水俣の取材を再開。

北岡秀郎
Hideo Kitaoka

1943年、熊本市に生まれる。弁護団事務局の仕事を通じて水俣病原告の本人尋問に接し、記録の必要を感じ撮影を開始。2016年より「月刊ミナマタ」の発行を開始。ハンセン病、川辺川ダム問題にも接し撮影、発信。現在は編集著述業。福岡県大牟田市に在住。

小柴一良
Kazuyoshi Koshiba

1948年、大阪府に生まれる。72年、西川孟写真事務所に撮影助手として入所。土門拳氏の「古寺巡礼 1 大和篇」「女人高野室生寺」などの撮影助手を務める。74年から水俣・出水の水俣病取材を開始。2018年、福島を取材・撮影した展覧会を開催。

芥川　仁
Jin Akutagawa

1947年、愛媛県に生まれる。夜間中学、三里塚闘争、土呂久鉱毒事件を取材。78年に水俣病事件の被害者と出会い、同年12月に水俣へ。約1年半の間、水俣病センター相思社の職員として患者の畑仕事などを手伝いつつ水俣病事件を取材。宮崎市在住。

田中史子
Fumiko Tanaka

1941年、長野県に生まれる。87年に行われた大規模な現地調査（1000人以上の水俣病患者が確認された）をきっかけに「患者が1000人いるなら100人の取材をしよう」「とにかく手足のしびれを撮らなくては」と思い、同年から水俣での撮影を開始。

熊本日日新聞社「新聞博物館」
*1号館で受付後、2号館５階にて入場
駐車場有り
交通センターからバスで15分程度
JR「平成駅」から徒歩10分
JR「熊本駅」から徒歩23分

【関連トークイベント】「写真家が見た水俣」
第1回: 4月30日(土) / 第2回: 5月14日(土) 開場13:30　開演14:00-16:00
会場｜熊本日日新聞社 本館2階ホール｜ 参加費：無料　定員：150名（予約優先）

予約・問い合わせ「水俣・写真家の眼プロジェクト」 FAX: 0966-62-1799 / TEL: 0966-83-7181
Email: 9project1212@gmail.com　詳細は https://kataritugu.jimdofree.com/